

日 時	令和6年1月25日（木）15：30～17：00
場 所	岐阜市役所 6階 6-1 大会議室
出席者	関係機関 1名
	一般・特定・障害児相談支援事業所 13名
	障害福祉サービス提供事業所 9名
	指定管理、委託事業所 4名
	（合計 27名）

○検討テーマ…「強度行動障がい児・者について」

これまでに強度行動障がいの支援体制・人材育成等について協議し、岐阜市における支援の在り方・チーム作りについて協議してきた。

今回は、岐阜市で生活する強度行動障がい児・者の生活状況について理解し、支援や関わりについて感じていることを共有した。また事業所で受け入れを促進していくための支援者チームの在り方について協議した。

1. はじめに

- ・岐阜市障害者総合支援協議会の概要
- ・第7回専門部会（テーマ別分科会）の趣旨や流れについて

2. 岐阜市強度行動障がいの人の状況について【資料1】

- ・岐阜市内の在宅で生活する強度行動障がい児・者は93人（令和4年3月時点）。
- ・岐阜市で把握している数であり、申請がないため埋もれている人がいる。
- ・内85人は生活介護を利用（令和5年11月時点）。
- ・強度行動障がい児・者が利用する日中サービス提供事業所に偏りがある。
- ・強度行動障がい児・者への支援について、日中サービス提供事業所は職員の配置や環境等の体制面の課題以外に、職員の専門性を上げることが課題ととらえていた。
- ・相談支援事業所からは、受け入れ先の事業所の確保の難しさが課題としてあがった。

3. 各事業所から強度行動障がいへの対応について思うこと

□社会福祉法人至誠会 障害福祉サービス事業所ル・リアン【資料2】

- ・ル・リアンの生活介護の利用者の多くは自閉スペクトラム症の方である。
- ・強度行動障がいの方を受け入れるにあたり、建物に入れないこと、保護者から離れられないことがあるが、この対応の中で強い抵抗から自傷他害行為に至り、個別対応をする、それが職員の負担感を大きくし、受け入れが難しいという結論となってしまうことがある。
- ・強度行動障がいは生まれ持った障がいではなく、二次的な障がいである。個別因子と環境因子を併せて分析し特性を踏まえたアセスメントから、支援の計画・実施・評価を行い支援していく。
- ・支援計画の作成には、短期的かつ具体的で実現可能な目標設定をしていく。

- ・目に見える行動にだけ着目せず、本人にとっては意味のあるその行動の背景をとらえていく必要がある。
- ・見通しを一つずつ増やしていく。見通しがつけば当たり前になるため、大きなストレスを感じずに次のステップへと進むことが出来る。
- ・行動障がいが出た状態で行動を変えることは困難であるため、初めに変わらなければならないのは支援者である。

□社会福祉法人同朋会 障害者総合生活支援センタークロス

- ・入所施設の利用者は高齢化・重度化し、介護の比重が多くなっている。
- ・支援力の低下や人手不足、環境の問題等で、限られた人しか受け入れられない。
- ・他の利用者の安全を考えると、新規の強度行動障がい児・者の受け入れは難しい。
- ・どんな難しい障がいの人でも、環境が変われば時間をかけて慣れる必要がある。
- ・将来を見据えて、様々な関係機関との関係づくりや居場所づくりをしていきたい。
- ・相談支援専門員と保護者の思いのギャップに、折り合いをつけることが難しい。

□岐阜県発達障害者支援センター 発達障害支援課【資料3】

- ・岐阜県では平成26年から「強度行動障がい支援者養成研修」を実施し、受講者は1500人程になった。
- ・受講後に強度行動障がいについて学ぶ機会がないことや、実践してもうまくいかない、相談できる場がないという声があるため、「強度行動障がい支援者養成フォローアップ研修」を今年度から実施している。
- ・「強度行動障がい支援者養成フォローアップ研修」は、事前学習、実践報告、施設見学、自主学習、事例検討及び意見交換で構成される。
- ・現場の思いの理解や協力を得るために、支援者だけでなく管理者にも参加いただいた。
- ・地域でペアレント・トレーニングが受けられるように、「ペアレント・トレーニング支援者養成研修」を実施している。
- ・コミュニケーション支援の難しさや重要性から、「コミュニケーション支援技術向上支援事業」を実施している。コミュニケーション支援において、PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）が有効であるとされている。
- ・岐阜圏域の強度行動障がい医療支援センターはのぞみの丘ホスピタルで、地域支援センターは未設置である。岐阜県発達障害者支援センターは後方支援にあたる。

4. 意見交換

- ・支援者が強度行動障がいについて把握していないと、支援に結びつかない。強度行動障がいの状態を作らないことが大切。
- ・支援者の環境や考え方が変わればアプローチ方法も変わるため、相談支援専門員として知識や経験等押さえておかなければならないことはたくさんある。
- ・まずは利用者を受け入れてみて、短い時間からでも関わりを持つことが大切。
- ・本人の見立てを間違えると本人が望んでいない方向に進んでしまうことがあるため、

アセスメントしてひとつずつ広げていく必要がある。

- ・強度行動障がい児・者を受け入れていた時に、支援に行き詰まりを感じたが、他機関を交えての話し合いは、とても有意義だった。
- ・事業所ごとに偏った支援になりがちのため、外部の目が入ることは大切である。
- ・支援が困難な方を受け入れていけるような方法を一緒に考えていけるチームを作っていきたい。
- ・チームメンバーは未定だが、行政・サテライト・強度行動障がいに詳しい方がメンバーになって回っていけないか検討している。
- ・活動状況については、岐阜県発達障害者支援センターに報告していきたい。
- ・チーム支援体制があれば、各支援者の考えを共有する場になると考える。
- ・相談支援事業所によっては、相談支援専門員が一人しかいないところもあるため、チームがあれば一人で考え込んでしまうこともなくなるのではないかと。

5. まとめ

- ・支援者が強度行動障がいについて理解し、知識や経験等を支援者間で共有することで適切な支援が出来る。
- ・強度行動障がいの方の行動の背景をとらえ、本人が受け入れやすい状況からスタートすること。支援者が共通理解をし、適格なアセスメントし、次の支援へというように段階を経て支援していくことが重要である。お互いに見通しを増やしていくことで時間はかかるが受け入れていくことが出来る。
- ・強度行動障がいの支援者チームがあることで、支援について事業所だけで抱え込むことなく、関係者が一緒に考えていくことが出来る。

6. 当日の様子



7. 当日アンケートの結果

①本日の専門部会全体

良かった	… 50.0%
概ね良かった	… 40.0%
普通	… 10.0%
あまり良くなかった	… 0.0%
良くなかった	… 0.0%

②強度行動障がい判定を受けている方の状況

良かった	… 20.0%
概ね良かった	… 50.0%
普通	… 20.0%
あまり良くなかった	… 10.0%
良くなかった	… 0.0%

③各事業所から強度行動障がいへの対応について思うことを発表

良かった	… 40.0%
概ね良かった	… 40.0%
普通	… 20.0%
あまり良くなかった	… 0.0%
良くなかった	… 0.0%

④グループワーク

良かった	… 0.0%
概ね良かった	… 10.0%
普通	… 90.0%
あまり良くなかった	… 0.0%
良くなかった	… 0.0%

⑤強度行動障がい児者への支援について思うこと、感じていること

- ・ チームで活動するにあたり、実際に施設に行ってみるとのこと、良いことだと思うが、来てもらうのに時間がかかってしまい、それに伴い経費面も課題になってくると思う。IT化が進んでいる現代、Zoomなどを利用してオンラインで施設を映して見てもらい、話をする方が気軽に実行できるのではないかと思う。
- ・ チームで取り組むことの難しさを感じている。共通理解、同一支援、取り組むまでのハードルの高さなど。上手くいった事例を聞き、実施することの大切さを改めて再認識した。
- ・ 巡回型相談に賛成。
提案 1→強度行動障がいと認定されている児者だけを対象にしないでもらいたい。ポーターの方への対応にも悩んでいる事業所はたくさんある。行動に悩んでいる方を対象にして欲しい。
提案 2→保護者や家族が環境因子であることが結構多く、事業所だけの対応では空回りで職員の疲労感だけが溜まってしまう。家庭や家族も対象に入れて欲しい。
提案 3→強度行動障がいなど話し合う分科会の時間を増やしてほしい。
- ・ 次年度における取組や計画が明確にできたような分科会だった。主催者側と出席者側の熱量差、温度差があって司会は大変だったと感じた。否定的な意見も含めて出席者はもっと積極的に意見を出せるようなスキルの底上げも必要だと思った。
- ・ 強度行動障がい児者の支援をチームで行うということには大いに賛成。可能であれば

8050 問題にも対応出来る専門家からなる支援チームがあってもよいのではないかと考えている。現在を含めて将来的にも人材が不足する中で適切な支援を行うために、それぞれの社会的課題に対するチームアプローチが必要だと考える。

- ・毎回、勉強している。研修などを積み重ねて、自身に落とし込むことで現場の支援に繋がっていると感じている。
- ・強度行動障がいには周りの環境因子が原因でもあり、自分たちがまずは変わることと話を聞き、まさにそうだと感じた。アセスメントが不十分な事例が多くあるので、アセスメントの見直しからしていきたいと思う。しかし時間はかかることなので、その時間のかかる間に、支援者側にも達成感が味わえるようにしていきたいと思う。
- ・発表者の話にもあったが、施設職員の支援力の低下が気になっている。気にしていない職員もいますが、わからない、どうしたら…と悩んでいる職員もいる。スーパーバイズできるチームが現場を巡回することができたら、本人、家族、職員にとって良い効果があると思う。
- ・強度行動障がいの方の利用が増えてきた時のことを想定して、他の事業所の取り組みなどを聞きたいと参加した。チームで支えていく体勢が作られるとのことで、今後、相談したいと思った。